

第10分科会

文化と関った仕事づくりと地域おこし



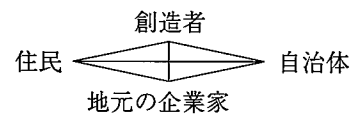
荒木 昭夫

(日本児童青少年演劇劇団協議会)

始めに (経過と問題提起)

前々回は、92年11月の<京都>、前回は94年11月の<名古屋>であった。それらの成果を踏まえて展開し、我が国の「文化と協同」に関する運動に寄与したいと考えた。また東北という土地、風土。ここで起こす文化の仕事と自治体との連携、企業の社会貢献など、非営利組織の活動についての経験と意見を交流し、それぞれの分野での展望を拓きたいものと考えていた。

- ① 人と地域に役立つ 仕事。
 - ・財務と責任のある 参加。
 - ・人の成長をつくる 組織、のあり方。
 について議論することが必要だとし、さらに
- ② どんな展望がつかれるか、を考えると、



こんな関係が、創られていることが必要だろう。……と経験的には考えられるが、それで正しいかどうか。

- ③ 今日、文化の仕事起こしは、資本主義市場経済システムの中でどんな位置を占めるのか、占め得ないのか。
- ④ 文化的諸活動が公共の財を作り出す事業として、どこまで認知される状況を作り出して来たのか。とも柱を立てていた。

それは単なる経験交流に止まらず「それなら、我々が地域でも、また一つ元気を出して始めてみようか」と思い始めて帰途につくことになることを期待した。

どれだけ仕事を起こしたか。どれだけの人がある仕事に専門的に関わって、納得のでき得る収入を得ることが出来たか。その仕事を継続せしめ得る組織的体制を構築し得たか。その交流である。

我々にとって欠落している実践は、その「事業」に自ら「出資」して参加するという行為である。まず、出資しているか。出資したのなら、そのお

- 司 会 荒木 昭夫 (日本児童青少年演劇劇団協議会・東京)
- 飯島 信吾 (シー・アンド・シー・東京)
- コメント 安藤 隆之 (中京大学)
- 千田 忠 (青森県国民教育研究所・青森)
- 報 告 船木 幸一 (昭和村教育委員会・福島)
- 薄 崇雄 (喜多方プラザ文化センター・福島)
- 細越 雅子 (遠野のかたりべ・岩手)
- 長澤 裕二 (山形フォーラム)
- 林中 直樹 (北海道こども舞台祭典)

金の行方を当事者として監視しているか。故に、その出資した事業の成長に関心が掛かる。その金が「不分割積立金」であると承知していても集団の成長に拠金して行くことの意味が深く理解されていくのではないか。それぞれの発言、一つ一つが、市民のこぼれで語る現代日本の文化の実相となると思うからである。

準備された報告は以下の5本であった。

- ① からむし織事業の展開
福島・昭和村役場 舟木幸一
- ② 地域のスタッフづくり
福島・喜多方プラザ文化センター 薄崇雄
- ③ ふるさとことばは心をつなぐ一語り部活動を通して思うこと
岩手・遠野 細越雅子
- ④ 観客が主役の映画館—山形フォーラムの12年
山形・山形フォーラム 長澤裕二
- ⑤ 北海道こども舞台祭典3年間を貫いた北海道方式の協同
北海道・同実行委員会 林中直樹

会津地域の文化活動

大沼郡昭和村。ここは老人人口日本第2の高齢者自治体で、人口2,200人。昭和元年に合併して出来た村だからその名となったが、からむし栽培の歴史は応永年間にまで遡る。換金作物としての苧麻(ちよま)は、会津苧と呼ばれて15世紀以降、越後上布の原料供給地としての役割を担ってきた。飢饉や大戦によって食料畑への転換を余儀なくされ、さらに化学繊維の台頭で需要の激減に遭遇しながらも、連綿としてこの会津郷からむし織りは伝統工芸として生き延びて来た。が、この伝統技術者の高齢化と後継者の不足は解決されていなかった。それは村全体の危機感としてとらえられ、栽培・苧引き、糸づくり、手織りの技術者の社会的地位の確立が村のテーマとなった。村は日本全国の35才以下の女性に向かって呼びかけた。「からむし織りの織り姫になりませんか」。

それは一年間村民として滞在し、諸費8万円が支給され、からむし伝統技術保持者からの指導を

受ける、というシステムである。1年目には64人、2年目に48人の応募があり、今11名が村に残っていて、3年目には村の中からの応募もあったという。からむし織りへの意欲が喚起された証拠に違いない。その織り師たちは語っている。

「自分がとっても優しくなっていることに気付いています」「都会の情報より、風の音、光の色が毎日変化することの方に感動を覚えます」。

東京のデザイナーから転身したという女性は「雑誌のデザインを締め切りに追われながらただかっこよく見せることでやって来て、気持ちのすさむことがありました。ここでは栽培から皮はぎ、糸つむぎ、織り、すべて自分の手でやるのです。そこに魅力を感じています」と語る。この人、地元男性との挙式が近い。

「村おこしはリゾート開発でなく文化の開発でやるのだ。からむしを育む協同体としての連携は、村の文化を担って来た高齢者の生きがいを具体的な形につくり得て、村づくりが展望できる」と教育委員会職員舟木幸一係長は言う。

会津には深い文化が息づいていた。尾瀬を源流とする只見柳津は水の国。その三島町は「何もない山里」と卑下していたと言う桐の村。今も桐細工の村である。交流センター「山びこ」と呼ばれる社会教育施設がそこにある。法的には博物館なのだが、「地域の間人関係の再生を自ら設計できる力を養い、信頼しあって見通しを語り合い、力を寄せ合える仲間づくりのために」というのがこの施設建設の精神で、200席の小劇場とギャラリー、食体験のゾーンもある。地域に根付いた伝統文化との共生、継承。町(まち)内外の人々との交流、その知的刺激の享受と生産。そんな課題を掲げて自治体は住民とともに行く。そんな話が静かに語られている会津であった。

これら会津地方の公共施設の中心に喜多方プラザ文化コミュニティセンターが存在している。

喜多方はラーメンで有名だが、それは喜多方に文化があり、その文化とのタイアップがあってこそラーメンも有名になった、と地元の文化人たちは言う。人口37,000のこの街に12軒もの造り酒屋

がある。煉瓦作りのしっとりとした酒蔵が街の風景を造り出す。そのセンターに「せせらぎ」という名の公立の劇場がある。酒蔵では恒例の室内楽シリーズ「ザ・蔵シック」が催される。造り酒屋がこれを応援する。それは地元企業家が直に手を出して文化を応援している姿であるという。

喜多方プラザ文化センターには「舞台研究会うらかた」というアマチュアの集団がある。開館以前からの、歴史ある舞台技術者集団である。今では「日本舞台研究者連絡会」という名前をもった全国ネットをも構築し、プロへ成長して行く人材も輩出している。「地域で育ったスタッフこそが、地域の感性を一番深く理解する。だからこそ地域の独自性が発揮できる」と館職員の薄崇雄氏は言う。

普通、市民劇場など公立文化施設がその自主事業として「演劇」などを制作する時、有名俳優などから集めることが多いものだが、ここではまず、何を創りたいかを論じ、市民の必要度を計量し、そして出演者よりも先に裏方、スタッフから人材を固めて行くという。彼らがNLCフェスティバルと言っているのは、会津地方の広域圏組合が主催するもので、New Life Circleの頭文字を取って命名したものだそう。そのフェスティバルとは、地域住民の自発的な諸活動が起こるなら、それを横に繋いで他の団体を巻き込んでいくようにと助言する。住民からの企画が出されると、それを更にグレードを上げるために補助金を付けるという立場をとり、住民と、自治体と、専門家との三角錐を作り上げるのだという。

会津の話が続いたが偶然のことではない。これらの活動を掘り起こし刺激し合い繋いで来たのが、この地に根を下ろした劇団風の子東北事務所の澤田修氏だったと紹介しよう。彼は喜多方の産だ。「もっとも東北らしい過疎地での公演にこだわり続けたいと考えた。ならば50,000人以下の地域を拠点にするのがいい。となると演劇だけでは食べていけないこととなる。故の一つは公演、一つは演劇の指導・講習、あと一つは地域づくりとなる他の仕事おこしなのだろう」と。地域に根付

く演劇人はこうして地域をも組織する。

出資、企画、映画の復興

映画にかかわる話をしよう。山形フォーラムという市民立、映画館の事だ。報告は長澤裕二氏。

「東京などの大都市では上映されているのに、地方都市ではいくら待っても上映されない映画がある。かける映画の選択は作品の善し悪しではなく、客が入るか入らないかによって決められるからだ。とすると地方に住む映画ファンはどうすればいい? そこからこの運動が始まった」と長澤氏は説き始めた。

市民の財力での映画館を造ったのである。一つの建物に二つの映画館。一つは娯楽大作のロードショー、今一つは映画ファンこだわりの作品をかける小会場の映画館。当然のことながら一番の難関は建設資金だった。10年分の会費10万円を前払いで支払う事と、理事の大口出資で資金を調達した。法人は株式会社だが「利益の配当はしない」と最初の株主総会で決めて出発。3年目で軌道にのった。「山形フォーラムはいつもいい映画をかけてくれる」という評判が人を呼んだのだ。妨害というものがあつた。映画館主の集まりである興業組合の圧力であった。外部のものが映画を上映しようとする、配給会社にフィルムを貸し出さないように圧力をかけて妨害する。山形フォーラムも一旦その興業組合に加盟したが、すぐ除名された。理由書には「フォーラムは観客の味方をしているから、我々の敵である」とあつたという。除名の狙いはフォーラムを潰すことであつた。メジャーの配給会社が興業組合の意を組んで、組合員以外には作品を提供しないという了解があるからである。だがこれも乗り越えられた。配給会社側が、売りにくい作品、他館が喜ばない作品を率先して買って来て、しっかりと観客に売ってくれるこの山形フォーラムを潰してなるものかと逆に支援の側に回つたのである。今も前進しているがその秘訣はと言えば、会員が作品選択の企画に参加していくシステムにあると言う。山形4館、福

島6館、盛岡3館、計13の映画館を運営している。

遠野の語り部

遠野から語り部が参加していた。昔話を語るのだが老人ではない。細越雅子氏、働き盛りの女性である。柳田国男著「遠野物語」の興味に惹かれて遠野を訪問する観光客も多い。だが対応する店員は標準語を使い、真の語り部の方言はまるで解らない。ほどよく解る方言で語りの出来る人との事で31歳からこの道に入ったという。レパートリーは50話ばかり。「自殺を思い止まりました。ありがとうございます」という巻紙の手紙が来たという。

街からも、百枚のポスターよりも、一人の語り部の語りの方が人を吸い寄せられると言われて、元氣を得ていると言う。

「ふるさとの言葉は充分に人と人との心を繋ぐ力のあることを実感します。語りながらも私自身が、その遠野の言葉に生かされている気がします」と雅子さんはつぶやいた。

「んだんだ」とつぶやきが返ってきた。この場に東北人も沢山参加していたのである。

北海道子ども舞台祭典

子どものための演劇祭典には前史がある。

85年夏、児童・青少年演劇に関わる全ての団体が結集して佐渡が島全島を会場にした大祭典を開催した。それは児童・青少年演劇の活動とその存在をひろく社会に知らしめようとして発意されたものであつた。成果は充分に上がって、以後これを契機としたさまざまな取り組みが各地で始まった。それを関係者は「祭典運動」と呼んだ。小豆島、吹田、岸和田、鹿児島、熊本、福井、石川、新潟、などというようにである。北海道子ども舞台祭典は92年から3年計画で始められた。

北海道には54の子ども・親子劇場と、幾つかの創造団体がある。北海道212自治体の全市町村で上演活動をするを目的として実行委員会が組織された。子ども劇場側が公演場所と金と観客を

準備し、創造団体が作品を提供するという関係である。

「勝負は実行委員会の組織の仕方にあった」と報告された。現地実行委員会と地域実行委員会と全体実行委員会との3層を重ねたという。

子ども劇場のまだ作られていない市町村では、まず教育委員会に行く。そのとき「後援をして下さい」でなく、「興味を持ちそうな方を紹介して下さい」と頼む。少しでも自主的な動きを生み出し、地域の人たちとのつながりを作って後につなげる事を願うからである。しかし多くの場合「無料公演をしても人は集まらない。有料で、しかも住民に券売りをさせるなんて成功する訳はない。そんな人材はいない」という返事ばかりだった。

しかし、成功した。どんな小さな町にも子どもの事を考えている人たちは必ずいるし、その人たちが集まれば集まるほど力は大きくなって、上演活動ぐらいは出来てしまうということだった。現地には一人しか会員のいないところもあったが結果は200人の実行委員に膨らんだという。呼びかければ応えて貰えるという確信だ。第1年度にはサハリン州立人形劇場も、第3年度にはノボシビルスク州立人形劇場からの参加もあった。

第1年度は70市町村、212回、46,541名の有料入場者。3歳児以下の子も数えると55,000名を越えた。北海道212市町村の3分の1で実施が出来た。第2年度では96市町村、322回、有料観客は63,611名。第3年度では83市町村、310回、60,000名。

3年間で一度でもこの祭典にかかわった市町村は119に上ったが、取り組めなかったのが93市町村だったと悔しがる。3年間計844ステージ、17万人の観客には海外からも注目された。

議論と展望

議論の結果はどうであったか。今回も記録された感想文から分科会の到達点を確認しておこう。

仙台 森文恵「若年層が自分の地域に自信を持っていない、ということはこの仙台でも言えるこ

と。価値観が全国的に統一されてしまって、マスメディアに乗ることによるメジャー性がすべてになってしまっていると思う。たしかに外部から評価されることは大切だが、むやみに自分のまちを卑下することは悲しいことだ。細越さんのように自分のまちを胸をはって良いところと言えるようになりたいと思う」

喜多方プラザ文化センター 薄崇雄「地域で活動の質を上げてやって行けば意識しなくても世界の地域と簡単に繋がって行くのではないか。地域での活動は地域にとどまってしまうことにはならないという確信を得た。」

関西映像 稲福勉「北海道祭典の話、一人しか会員のいない中で、その人を通じて広げて行くという実践。人を動かし、その輪を広げて行く事が大事な視点だと改めて実感した。今問われている仕事との関連で今更ながら参考になった。今回は実践を持って参加したい。」

センター石川 田中米「昭和村からむし織りの織姫制度の導入、山形フォーラムの2館方式による運営、会員による企画会議への参加など、ワクワクするようなアイデアを持って、妨害にも負けず、勇敢に取り組んでいる姿に目を見張った。語り部の細越さんの語りには、暖かい母親の感触を思い出し、じんわりと胸があつくなった。」

劇団たんぽぽ 上保正道「自治体の中で文化に対する考えが喜多方プラザや昭和村の考え方に近づいたとき、文化による地域おこしが出来る。この考えをぜひ自治体の職員に広げる方法を探りたい」

福島大学学生 山岸孝浩「こうした分科会のあることがあまりに学生に知らされていないことが残念。幅広い宣伝がなされていい」

これらの感想からみても5本の実践報告は充分に感銘を与えていた。日々の活動の中で、それぞれの人がそれぞれに展望を見いだしていたのだった。

—あのようにやってみよう。やればできそうだ、などと。だから2年後には、実践を持ってやって来るとぞ—と。

映画館の建設と運営を語った長澤裕二氏はしかし、「実践報告はとても興味深く面白かったが、文化の協同というイメージはなかなか難しい」と書く。司会者の一人千田忠氏もこう記している。「報告はいずれも圧巻であった。そのいずれにも極めて感動を受けたし有意義であった。しかしこうした形態の分科会のためか『感動に満ちた話し合い』に終わったように思う。分科会をトータルにコーディネートすること、課題を焦点化することの難しさを改めて感じる。『文化の協同』の分科会を恒常的な研究会にすることの必要性を改めて感じる」と。時は来ていると思う。

まとめに代えて、神奈川県高齢者協同組合の大黒聰氏のものを記録しておこう。

「文化の面において『協同』を考えるにあたって二つの面を考える必要があると思う。一つは文化を『生み出す者』と『受け取る者』との協同である。この点について今回直接的には話題とならなかったが、しかし前提条件として考えておかなければならない。この問題は『組織』にも係わってくる。もう一つは事業展開に当たっての諸団体、諸個人との協同である。これについては幾つかの話があった。人々の主体性、自発性を生かした努力の展開が事業や活動を成功に導いたことが示された。もうひとつ共通した課題は『行政との関わり』であったと思う。行政サイドからの『生涯学習』『文化行政』についての努力が示された。その努力が否定されるものではないにしても一定の限界があることも事実ではないだろうか。このあたりの議論はまだ深まっていらないように思われる。『文化』の協同に関する議論は多くの事例が示されたにもかかわらず、しかもこれからが大変重要であるにもかかわらず、議論はまだ端緒についたところだと思われる。さらに議論を重ねていく必要があるのではないか。しかし『議論における協同』、つまり共通認識が一步進んだことは間違いない。」と。

同感である。だから筆者も感想を述べたい。

文化の活動が芽吹いていた。風雪に耐え大地に張った骨太い運動があるとの感触もあった。時代

に翻弄されることなく、今興ろうとしているという実感である。それは地域に根差した人と人との繋がりがかった。仕事が起こり、地域が息づけば、そこに新しい活動が立ち上がっているのが分かってくる。2年後の集会にはしっかりとした議論を構築しよう。そのためにはもっと実践がいる。

我が国も今や高齢者社会。「元気な高齢者がもっと元気に」と宣言して高齢者協同組合も出発した。人間らしい文化を伝え育むために、より積極的に社会に対する役割を果たすために。新しい時代の足音だった。そういえば芸能実演家は総じて長寿だ。自らを律し、腹の底から声を出し、自らの芸能でもって日々自らをセラピーしているからだと思ひ当たる。自らを生きなおす。

そうだこれこそが、人類の存在にとって文化・芸能の、不可欠であることの説明となる。